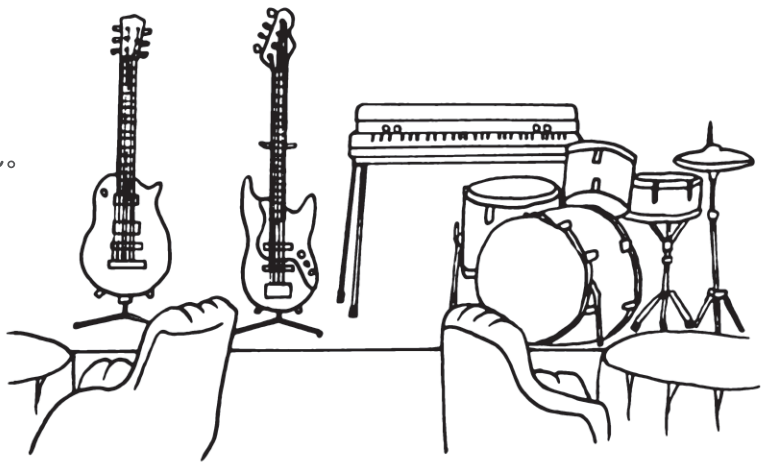
松任谷正隆の

僕のひとりごと 28

VOL.28　箱バン

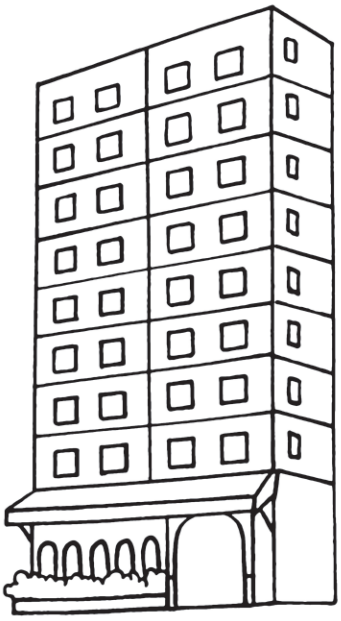
前回、窓のない犬小屋みたいなホテルに泊まったことを書いた。それでも天国みたいだった、と。
人間、コントラストだなあ、とつくづく思う。
嫌なことのあとなら、ちょっとしたいいことでもすごくいいことのように思える。
だから幸せな人はもっと幸せを求めても、たいしたことの無い幸せしかつかめない、ということになるのか。
でもやっぱり不幸はいやだな。

窓のない犬小屋みたいなホテル・・・ちょっと言いすぎかもしれないが、名古屋でも１回あった。
しかもその時は１泊だけではなく数泊しなければならなかった。
あれはハイ・ファイ・セットというグループのプロデュースをしていた頃だから、70年代中頃ということになるのだろうか。
そのホテルの上層階のラウンジみたいなところで数日間ライブをやることになったのだ。
窓のない部屋があるくらいだからどんなホテルか想像出来ると思う。
ラウンジには箱バン（つまりそこでいつも演奏しているバンド）がいて、その人達の楽器を借りることになっていた。
箱バンのおじさん達は、まあ、なんだかやさぐれていて感じの悪い人たちだった。
40いや50代くらいだっただろうか。20代の我々のことをじろっと見回した後に、楽器は気をつけて使えよ。
使ったらちゃんと元通りにしろ。少しでもおかしな事になっていたらただじゃおかないぞ、
というようなことをくわえタバコで言った。
こちらはちゃんとアルバムも出して
レコード会社と契約しているアーティスト。
向こうはちょっと楽器が弾けるだけのおじさん。
分かっているのか？とふつふつと
こみ上げてくるものを押さえながら、
わかりました、ありがとうございます、
と頭を下げる我々。不条理だなあ。



それにしても今考えてみれば、所属事務所はなんであんなラウンジなんかで演奏する仕事をとってきたんだ？
ファン層というものをちゃんと考えていたのだろうか・・・。

それでも毎日、あまり聞いていなさそうなお客の前で何曲か演り、その窓のない部屋に戻った。
あ、ハイ・ファイ・セットのメンバーの部屋には窓はあったと思う。
ま、そこはアーティストで、しかも年上なんだから当然だろう。



さすがに外食嫌いの僕でも窓のない部屋でご飯は食べなかった。
どこで食べたのか、すっかり思い出せないけれど、ひょっとしたらそのラウンジで食べていたのかもしれない。

そういえば、箱バンのおじさん達の演奏も聞いたっけ。
まあ、お客のリクエストに応えたり、演歌とかをやるような、イメージ通りのおじさん達で、お客には気持ち悪いくらい愛想が良かった。
僕たちがいつまでたっても下手に出ていたこともあり、最後の方はいいおじさん達になった。おまえらもしっかりやれよ、レコードくらい買ってやるから、と言われ、ちょっと嬉しかったことを覚えている。
おじさん達に送り出されながら僕たちはホテルをあとにした訳だけれど、ふと見上げたホテルが本当に細くて、びっくりしたのも忘れられない。

松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。
4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。
20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、
バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。
その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。
鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。
2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。
日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。
著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。

イラスト：W.Valy